

高橋 虫 麻 呂

中 西 進

一

まず私どもが高橋虫麻呂の作品を読みまして第一に感じますことは、高橋虫麻呂の作品が非常にきらびやかな、華かな様相を呈しているということではないかと思ひます。例えば天平四年に高橋虫麻呂は節度使として下ります藤原宇合に送る一首の長歌を作っております。「白雲の 竜田の山の 露霜に 色づく時に 打超て 旅行く君は……」という歌ですけれども、その最後のところに帰路をのべまして、「冬ごもり 春去り行かば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 竜田路の 岡辺の路に 舟つつじの にほはむ時の 桜花 咲きなむ時に 山たづの 迎へ参出む 君が来まさば」という一節がございます。この「舟つつじの にほはむ時の 桜花 咲きなむ時に」という描写は大変美しい。そして大変華麗な色彩に彩られていると思ひます。

そのような類の歌に例の「河内の大橋を独り行く処女を見て作れる歌」というのが虫麻呂にございまして、これももともと虫麻呂歌集ですが、「しなてる 堅塩川の さ丹塗りの 大橋の上ゆ 紅の 赤裳裾引き 山藍もち 摺れる衣著て ただ一人 い渡らす子は 若草の 妻かあるらむ 檉の実の 一人か寝らむ 問はまくの 欲しき吾妹が 家の知らなく」という歌です。この最初の「しなてる 堅塩川の さ丹塗りの 大橋の上ゆ」の中にも、大変華麗な色彩が幾つも塗りこめられております。さ丹塗りという言葉がそうですし、紅の赤裳裾引き、山藍もち摺れる衣著てという様な描写をしております。

こうした高橋虫麻呂の傾向は、言ってみればデカダンスと申しますか、頽廢の美とも言ったようなものを歌う傾

向にもさらに進んでゆくようです。例えば周准の珠名の処女を詠んだ歌にしましても、周准の珠名はどういう女性であるかという点、「胸分の 広き吾妹 腰細の 螺羸処女の 顔の さらさらしきに」というふうにご歌っております。胸分が広い吾妹で、螺羸蜂のような腰の細い処女であって、その姿がさらさらしかなかった。そして花のように笑って立つと、多くの男性達が周准の珠名の所へ集ってくる。すると「人皆の かく惑へれば うちしなひ 寄りてぞ妹は たはれてありける」というふうにご遊びに痴れ戯れていたと言っております。これを私は「頽廢」とでも言うべきものかと思うわけですが、そうしたある「頽廢」美の中に彼は入ってゆく傾向をもっていると思います。

そこで、それでは一体こうした高橋虫麻呂の華麗なる美というものは、一体何物であるのかということをお考えます。そういうことを考えます場合に浮んでまいります事は、高橋虫麻呂がある一つの憂いを持っていたということですから。例えば、筑波山に登る歌というのがございまして、これは「草枕 旅の憂ひを 慰もる 事もあらむと 筑波嶺に 登りて見れば」という歌い出しを持っております。そして次に目に満ちて広がる寂寥の風景を描写致します。

「尾花散る 師付の田居に 雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ」といいます。そうして、「筑波嶺の よけくを見れば 長きけに 思ひ積み来し 憂ひは息みぬ」というふうにご、長い日日間積み重ねられてきた憂いはこの風景を見ることによってやんだという歌いおさめを持っております。冒頭に旅の憂いがあり、末尾が「思ひ積み来し 憂ひは息みぬ」と歌われております。

一体、虫麻呂の中で、こうしたある憂愁と、先程申しましたような華麗なる色彩、頽廢の美といったようなものとは、どういうふうに関係しているのか。一般的に考えますと、この二つは、全く相対立し、相反し合うものではないかと思うのですけれども、この二つのものがどのように虫麻呂の中で位置づけられているのかということが俄然問題になってこようかと思ひます。

そのことを解決するためには、華麗さが幻想の華麗さだということに注目しなければならなりません。

最初に申し上げました字合に贈った歌は字合が発する時に作っている歌でありまして、その帰路は、あくまでも空想の風景であります。その空想の風景の中で『丹つつじの にははむ時の 桜花 咲きなむ時に』という華麗な風景が彼の目の前に広がってゆくわけであります。あるいは「河内の大橋を独り行く処女」、この歌も犬養孝氏が目の前

の大橋にはひょっとすると誰もいなかったのではないかと考えておられます。虫麻呂のいろいろの角度から考えますと、この推測はすぐれていると思います。これもやはり空想の風景で、何も見えない中で思い描いた風景がさ丹塗りの大橋の上を紅の赤裳の裾を引いてゆく少女、山藍もち摺れる衣着て行く少女であったわけです。

それから「周淮の珠名の歌」これは世に伝説の歌だといふふうに申します。そういたしますならば、これ又、周淮の珠名を實際に虫麻呂は見ていたわけではございません。空想の中で造型していった少女の像が華麗な、あるいは頽廢ともいったような姿を誇っていたということになるわけです。

私は先頃、大伴家持の「春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ処女」という歌の風景は幻想の風景だろうということを考えました。幻想の中に紅という色が出てくる。紅という色は移ろいのアンコンシャスなのだとということを考えているのですけれども、同じように家持は越中に赴任致しました最初の春に重病の病床にありながら、春の野に遊ぶ少女達の描写をしております、それが大麥に又、華やかな姿で描写されております。

あるいは大伴旅人が松浦川の玉島の淵で遊仙窟紛いの少女と贈答した一連の歌を作っているわけでもありますけれども、これも玉島の淵には勿論、神仙の女などというものが居るはずはございませんので、これ又空想の中に遊んだ風景であります。この中でやはり松浦川の瀬は陽光をきらめかせて、きらきらしく流れる。そしてそこで裳の裾をぬらして、神仙の女たちが魚を釣っているのです。こうした一連の作品から考えますならば、やはり華麗さというものの幻想性を強く考えざるを得ません。

二

夢と色との関係を心理学・性格学の書物に見ますと、色のついた夢を見ることは普通の人間では自然ではないと宮城音弥氏がいっております。大体十パーセント内外の人のしか色のついた夢は見ないのでそうです。それから、多色夢という色の多くついた夢は、例えば頭の痛い時とか、頭に怪我をした時とかに關係して出てくるのだということをハベリック・エリスがいつているようです。もちろん宮城音弥氏はそんなことはないかと否定しております。

懸田克躬氏の調査によりますと、色のついた夢を見る、さっき申しましたように普通の場合ではないのですけれど

も、その色のついた夢を見る人の四十パーセントが絵に興味を持っていて、絵にまるで趣味のない人は八パーセントにすぎなかったという報告をしております。さらに心理学者が色か、形か、という調査をするようです。ある図型を与えましてそれを色として意識するか形として意識するか、という調査をいたしますと、まず色として図型をとらえる人間は躁鬱質の人間だそうです。形としてとらえる人間は分裂質の人間だそうです。

華麗な夢をみた虫麻呂は躁鬱質のようです。この躁鬱質とか分裂質とか申しますのは、クレッチマーという性格学者が人間のタイプをこの二つに大別して考えているわけですし、それでは躁鬱質というのはどういうタイプなのかというところ、非常に人と妥協的である。人と強く争うことはない。人間的な暖さをもった人間である。いずれも分裂質はその反対になるわけです。それから世捨人といったタイプの人もこの躁鬱質の方である。さらに孤独ということにつきましても躁鬱質の人の孤独というのは、孤独ではあるのだけれどもけっして周囲から離れるという孤独ではない。言はば衆の中にあつて一人の孤独を感じるという形式でしょうか。そういうのが躁鬱質だという報告があります。

そう言われれば虫麻呂は大変人間的に暖い人間です。かなり妥協した人間だろうと思います。他者を強引につっぱねたと致しますならば、あんな寂しい歌は出てこなかっただろうと思います。虫麻呂が孤独だということは決して他を拒絶する孤独ではなくて、周囲の人間の中にありながら孤独であった。そう考えた時に虫麻呂のある面がある程度私に解った様な気がしたわけでございます。

こうして、虫麻呂は孤独な夢想家でした。その歌の華麗さというのは、孤独が心の中にあつて、そのアンコンシャスの憂愁から滲み出てきた極彩色の色だった。幻想の華麗さというのはより深い彼の憂愁を表している色彩ではなかったのか、と思えます。

三

それでは、なぜそのように虫麻呂は憂いを抱いていたのか、ということが次に関心をひいてまいります。先程の作品の中にも「草枕 旅の憂ひを 慰むる 事もありやと」というふうにてまいります、「旅の憂ひ」であるとい

うことは一つはっきりと出てまいります。

あるいはその他の筑波山の歌にしましても、「家の如遊ぶ」ということを言っておりまして、旅と申しますものは家を離れた状態ですので、家を離れた旅の憂いというものが一つ虫麻呂にあったであろうという事は当然想像されま

す。

さらに虫麻呂は他の多くの万葉歌人と同じように史書には登場致しません。それほどの微官であったという事だろ
うと思います。武田祐吉博士は、少初位上である高橋虫麻呂という、正倉院文書に出てまいります人間と虫麻呂が同
一人物であったのではないかと言っておられますが、そうなら大変な微官です。この人物と同じかどうかはともかく
としても微官であったことは間違いないだろうと思うわけでありませう。

さらにその上にもう一つ、虫麻呂は東国出身者だったのではないかという疑問があります。高橋連と申します氏族
は、もちろん新撰姓氏録などに述べられるところによりますと饒速日命の子孫でして、物部の同族になるわけであり
ます。それは右京神別、山城神別、河内神別に出てまいりますのがいずれもそうであります。それから高橋朝臣とい
う姓を別に致します高橋氏も姓氏録（左京皇別、同音太郎、撰津皇別、大和皇別）によって大変はっきりとしておりま
して、大毘古命の子孫ということになっております。つまり孝元天皇系の氏族という事になっているわけでありま
す。紹運録も大彥命・六雁命を高橋朝臣の祖としております。高橋連、高橋朝臣がいずれも畿内の出身者であるとい
う点は疑う余地のない事のようにです。

けれども、虫麻呂という名前、これがどうも妙な名前のように思えます。万葉集の中には五人虫麻呂という人物が
登場致しますが、一人はあの有名な安倍虫麻呂で、高橋虫麻呂以外は三人の虫麻呂がいるわけでありませうけれど、こ
れはいずれも東国に關係した人間であります。防人の名前として出てまいります。学者では下毛野虫麻呂があり、広
く古代の文献については、出身地の判明致します虫麻呂は三十六人おりますが、そのうちの二十三人はやはり畿内の
人間です。ですから三分の一しか畿外の間人はおりませんで、必ずしも東国にこれはずばりと近よってくるという傾
向はとっていないのであります。東国關係者は九名でございます。

それから高橋連、この高橋連の者で出身のわかる四名（ほかに不明が三名）には、畿内の出身者は一人もおりません。

伊賀国、越前国、対馬です。畿内にはどうも高橋連は関係がないように思われます。

さらに調べてみますと、結論的な事を先に申した方がお解りいただけるかと思うのでそのような順序で申し上げますと、高橋朝臣系統というのは安房から上総・下総にかけての一円に勢力を持っていた。どうも千葉県の膳部出身者が高橋朝臣になったこともあるのではないかとこの疑問をもちます。

なぜそんなことを申すのかと申しますならば、景行紀五十三年に六雁命が安房浮島宮において天皇の饗応をしたという記事がございます。この、巡幸者に対して贄を奉るということは、厳肅に申すと国魂の献土とも言うような行為でさえあったと言うことが一つ考えられるわけでありまして、その人間は当然土着の人間でなければなりません。

そしてさらに六雁命が亡くなりなりました時に高橋氏文の中に高橋氏を「上総国ノ長トモ、淡国ノ長トモ……」するという記事が出てまいります。上総国の長、安房国の長はここでは、はっきりと高橋氏になったわけでありまして。

その他には「和加佐ノ国ハ六雁命ニ永ク子孫等ガ遠世ノ国家ト為ヨ」といい、これはひょっとするとお隣の越前の国に高橋忌寸の一族が住んでいたようですので、これと関係があるのかもしれない。

そして書紀では浮島の宮で贄を奉った時に物部大江という人間の佩いていた大刀を取ってそれを六雁命に与えたという記事が出て参ります。その物部の人間が大刀を取られて、それを六雁命に与えたという事は、安房の伴部の物部を高橋朝臣が支配したことを表しているのかもしれない。ひょっとして本来の物部、後の高橋連系が、その時に高橋朝臣系の系譜に吸収、合併されていったというようなことを考えるわけであります。

さらに日本書紀の安閑天皇の元年四月の記事によりますと、膳臣大麻呂という人間に関わる話としまして千葉県の伊葛宅倉が作られたという記事が出てまいります。申しおくれましたが、膳臣が後に改姓して高橋朝臣となるわけですね。

これは伊葛の由来ですけれども、国造本紀によりますと、安房の国造は大伴直大滝であって、これが成務朝に任命されたという記事がございます。さっき言い落しましたけれど、景行天皇を饗応致しました時に六雁命は膳の大伴部を賜っているわけでありまして。こういうところから六雁命というのが贄を奉る膳部のこの辺の支配者であったのではないかと考えられます。

和名抄の中には下総国の結城郡に高橋という地名が出てまいります。神名式の中には結城郡に二座ある小社で高橋神社というのがございます。この祭神は六雁命であろうということを特選神名牒では強調しています。

そう致しますと安房から下総の結城の辺にかけて膳臣の勢力がのびていたのではないだろうか、それが後に高橋朝臣という名前を賜ったのではないだろうか、こう思うのであります。

この高橋という地名は大和で申しますならば山の辺の高橋でございまして、だからこそ、饒速日の子孫として高橋連は物部の一族であったわけでしょうけれども、その高橋という名前を膳臣が賜るという不思議さ、これはやはり旧物部系の高橋にこの膳臣の一族がいれば乗り換える形において、中央官僚として定着していったのではないかと、こんな推測が一つ成り立つわけであります。そして一方各地の膳部達は、これは朝臣ではございまして高橋連とか、高橋忌寸とかいう形で残り続けたのではないのでしょうか。もしそういう空想が許されると致しますならば、高橋虫麻呂はやはり東国の出身者であろうということになってまいるわけです。

四

もし、そうならば彼は東国における、大変傑出した人間であったに違いない。丁度藤原鎌足が中臣部の出身であつて、それが中央のあれだけの政治家になつたと同じように大変傑出した地方の出身者であつたに違いないと思つて、その高橋虫麻呂を見出した人間が藤原宇合であつたのではないか。そういう気が致します。宇合は養老三年七月に常陸国守となり、安房、上総、下総を管しております。

高橋虫麻呂は宇合に見出されたということにおいて洋々たる前途を夢見たに違いありません。ところがそういう人間にとって、都の現実、官僚的世界の現実を察しのつくとおりに、絶望的な現実しかもっていかないわけでありませう。そういう人間の「憂ひ」それが虫麻呂の「憂ひ」だったのでないだろうか、そう思います。

従いまして、この虫麻呂の「憂ひ」はただ単に色彩の華麗さにのみ関るわけはなくて、さらに深化しまして、いわゆる伝説歌人と呼ばれるような伝説の世界を作り上げてゆくのだらうと思つて、伝説を歌つたという評語は必ずしも説明として完全ではありませんで、仮構、フィクションの世界、ある世界を思い描くことによって満されない現実

のすり替えを行なったという方が正しいと思います。現実のすり替えによる仮構世界の構築が彼の伝説の世界だったわけです。

そこで、その仮構世界の中で虫麻呂が常に感じ続けていたものは何であったのか。これ又結論を先回りして申しますならば鈍（おご）ということを感じ続けていたのだらうと思います。愚しさを虫麻呂は常に感じ続けていたのではありません。なかつただらうかと思えます。「鈍」と申しましたのは例の浦島の歌の最後に浦島の子に対して「常世辺に住むべきものを剣太刀己が心から鈍やこの君」と言った、あれであります。これは反歌ですが、長歌の中では「愚人」というふうにも言っております。

こういうふうな「愚か」ということを虫麻呂が感じていたらしいという眼をもつて他の作品を見ますならば、例えば「真間の手児奈」の歌に致しましても「いくばくも 生けらじものを 何すとか 身をたな知りて 波の音の 騒く入江に」というふうな歌います。「何すとか」という言葉が出てまいります。これもやはり根底にはある「愚しさ」というものを感じていたのでないだらうかと思ふわけです。身を投げるということ、これは虫麻呂にとって一つの「鈍」だったのでないだらうかと思ふのです。

これは女性が「鈍」だと言っているわけでありませうけれど、この反対の男性はどうなのか。夏の虫が火に入るように女性に集ってくる、水門入りに船を漕ぐように集ってくる、そういう男性の姿を虫麻呂は描写致します。そういう描写はやはり根底に鈍の目をもった描写だったのでないでしょうか。「鈍」な女を愛する「鈍」な男の、「水門入りに 船漕ぐ如く」とか「夏虫の 火に入るが如」とかいうふうな、飛んで火に入る夏の虫のあの愚しさです。これは男の愚しさを根底に感じていたにちがいないのです。

さらに、こう考えました時に周准の珠名の歌がまさに浮び上ってまいりまして、「人皆の かく惑へれば」といいます。「惑ふ」という言葉を使っておりますが、男が皆このように迷っていると妹はどうか。「よりてぞ妹は たはれてありける」と言う。迷う男とたわれる女、これが虫麻呂の描く人間模様であります。そして、その反歌で真夜中でも周准の珠名は「身はたな知らず出てぞ逢ひける」、たな知らないという言い方さえています。

さらに何が「鈍」であるのか。今申しましたところから割り出しましても、こうしたいかにも人間的な状態、恋を

するという最も人間的な状態、これが虫麻呂にとって人間の「鈍」であつたわけです。それを証明致しますように、浦島の歌の中には「世の中の愚人」という言葉が出てまいります。「常世」という理想郷へまいります「海若の神の女」に会って「二人入り居て 老いもせず 死にもせずして」とこしへに ありけるものを「その次に「世の中の愚人」という表現が出てまいります、この「世の中の愚人」はどういうふうに言ったか。「吾妹子に 問ひて語らく しまらくは 家に帰りて 父母に 事ものらひ 明日のごと われは来なむ」と言ったのです。心配をしているだろうから父母に事情を話してきたいと思う、その行為、それが「世の中の愚かさ」だというふうには虫麻呂は歌っているわけでありませぬ。

それは山上憶良が世の中の雁字搦めの人間の呪縛にあつて「鶉鳥の かからはしもよ」と言った、あれと同じような世俗の人間の持っているであろうにもならない絶望的な状況、そういうものを別の角度からやはり「世の中の愚人」というふうに言っているわけです。父母を思い、家を思うという顧慮そのものが愚かさなのだ。そういう愚かさを持っていることによって人間は身を亡してゆくのだというその事であるわけです。

そう考えますと、この「鈍」は、まさしく虫麻呂にとっての自らへの「鈍」の自嘲だったのだと、考えるほかありません。自分の「世の中の鈍」を他人の中に見た時の意識、それがこうした歌になってくるわけでありませぬ。

筑波山の嬭歌会の、今日は神も「禁めぬ行事」で「人妻に 吾も交らむ あが妻に 他も言問へ」という歌がございませぬけれども、この中に雨に「濡れ通るともわれ帰らめや」という描写が出て参ります。いくら楽しいからといって、ずぶ濡れになつても帰らないというのは卑し過ぎませぬ。そう思つても言わないのが普通です。それを言うという、そのところが虫麻呂のある一つの卑しさだと私には思えて、何故このように卑しいのかという点が長く私を捉えていたことでした。それが以上のように考えてまいりました時、半ば自分では解けたように思いました。つまりこうした自らを嘲り、自らを虐げる、自虐のポーズが、ずぶ濡れになつたつて帰らないよというふうに関き直つて見せる、そういうところに出てくる卑しさなのではないか、というふうに関き直つて見えます。

しかし、そうした虫麻呂でも、それではそうした仮構の世界の中に埋没をして、忘我の境地に入ることができると致しませぬならば、それはそれで、又一つ幸せだつただろうと思つたのです。しかしそういう点においても虫麻呂は不幸

で、このように仮構の世界を持ち、このように現実を仮構世界の中に生きながら、その中に埋没し我を忘れることはできなかった詩人のように思います。

浦島の歌の結論の「鈍やこの君」というのも「お前は馬鹿だ」という、ある一つの断定を下しているわけでありませう。宇合に贈った長歌の中でも「千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ思ふ」と、立派な男子だと思つたと断言しております。こういうところに見られる、ある批評精神といったようなものが、虫麻呂の中にあるのではないのでしょうか。

ですから、虚構の世界に入ると致しましても、例えば浦島の歌は「春の日の 霞める時に 墨吉の 岸に出でて」波の上を通っている船を見ると「古の 事ぞ思ほゆる」というふうにある状況の設定があつて、その上で伝説の世界が展開をしてくる。そして最後には浦島の家廻が見えるというふうに、ちゃんと自己へ又、場面が戻ってくる。時間の混乱というふうなものはこの歌の中には無いわけです。ですから「墨吉の 岸に出でて」というのは、沢瀉博士が言っておられるように、何も日本海か難波かということを考える必要は無いので、じつと海上を見ていると浦島のこと が想像されるといふのだから、あれは瀬戸内海の海岸を見ていて、裏日本の浦島の幻想を持ったのだと思います。

そのような状況設定において、虫麻呂は決してその世界に、我を忘れて、身を振り乱して飛び込んで行くというふうなことはない。「鈍な」浦島や、「鈍な」周淮の珠名、そしてそれに集ってくる鈍な男達、それをじつと冷やかに横から眺めながら描こうとしている。一方ではその世界の中に現実のすり換えの願望を持ちながら、常にそれを、冷やかに醒めて見つめなければならなかったのが虫麻呂だったのではないだろうか。自嘲の中に孤独を一層深めながら、孤独の中で華麗な幻想を夢見た詩人、それが虫麻呂だったのではないだろうか、そう思います。(大久間喜一郎氏のテープにより、清水章雄君が文字化してくれました。両氏に心から謝意を表します。)